

シオヤ ワンダーランド



塩屋百人百想

「TARUMISM」は垂水のまちのあれこれを、暮らしぶりや住民の人となりを通してお届けする情報誌。第1号となる今号のテーマは「シオヤワンダーランド」。「塩屋って、どんなまち？」をテーマに、住んでいる人、お店をしている人たちの声を集めました。



ちょうどいいまち、垂水。

神戸市の西端に位置する神戸市垂水区は面積28.11km²、人口約22万人。南に海を望み、北に丘陵地が広がる変化に富んだまちです。そのほとんどを住宅地が占めるのも特徴で、都心への便利なアクセスを背景に、大阪・神戸のベッドタウンとして発展してきました。海と山とまち、そこに暮らす人々。垂水は毎日いきいきと暮らすのにちょうどいい。住めば住むほどたくさん「ええとこ」に出会えるまちです。



垂水PR動画はほかにもあります [神戸市垂水区 動画](#)

【塩屋までのアクセス】

- 電車で ※JR神戸線の最寄り駅です。
三ノ宮駅から 約17分
大阪駅から 約44分
姫路駅から 約38分
- 新幹線で
新神戸から 約25分
新大阪から 約49分
- 飛行機で
神戸空港から 約45分
伊丹空港から 約1時間20分
関西空港から 約1時間40分



令和4年3月発行 神戸市垂水区
〒655-8570 神戸市垂水区白向1丁目5番-1号
TEL.078-708-5151(代表)
Mail:tarumism@office.city.kobe.lg.jp

神戸市広域印刷物登録 令和3年度第579号(広域印刷物規格B-1類)

不動産屋さんが「神戸外れましたわ!」って感嘆したら、ものすごく景色やったんです。あれで引っ越しを決めました。(Wさん、編集者)

1歳半の娘が新鮮な魚しか食べてくれないうです。(Wさん、音響技術士)

海前のマンションに住んでいます。子どもが生まれて、お隣さんが「泣き声は気にしなくていいよ、むしろうれしから」と言ってくれて、抱っこにきてくれたりするんです。釣った魚をめっちゃ持ってきてくれること。「そそろ釣れる時期かなあ」と楽しみに待っていたりします。(Gさん)

私は生まれてからずっと塩屋におります。会社も、転勤とかね、そういうの全部断りましたから。(Kさん)

移転して行く前から「おえり」とか「こんにちほ」とか知らない人が声をかけてくれるんです。これはいいな、なんなんや?と思いつながら、歩いて、次第に僕も自然とあいさつするようになって。ちよくちよく来るようになって。まあなんかおもしろいまちやし、ここでお店をやってみようかなって。「シオヤチョコレート」店主

塩屋の空気がうんですか、なんかそんなものが、自分にあってるんですね。塩屋を冠にして、「塩屋の版画家」みたいなものを目指していきなと。(Nさん、木版画家)

まちで目撃するいろんな行いがシュールで、でも生活に根付いて、クスクスって笑える、おもしろい才能のある人がいっぱいいる。そういう影響もあると思うんですけど、私も暮らしててなんでも楽しんでいます。(Nさん、音楽家)

なんだろう、塩屋って、ちょっと変なものが多いかな。暮らしも、ただの暮らしじゃなくて、なんかちょっと変。(Sさん、音楽家)

引越すまちを探してぶらっと入った喫茶店で、「この辺に住むところありませんか?」と尋ねたら、「あんな誰や?」みたいな反応だったのですが、「子どもが4人いるんです」って言ったらマスターの目の色が変わって、それで、不動産屋さんとかお隣の豆腐屋さんとか通りすがりの人まで集めてきてくれて、「お前らすぐ家探してこい!」みたいな。で、その日のうちに家が見つかりました。(S&O家)

駅に着くまでに、絶対に知り合い2人に会うまちって、多分あんまないと思うんよな。知り合いが増える一方だから、そのうちそれ連うて全員と顔見知りになる可能性があるよね。(Iさん、農家・音楽家)

「車も入らない大変なところに、私が強引に家を買った結果、おもしろいことないって、結果的に住んでよかったって言ってもらえる場所かなって思ってます。(Hさん)

引越してきて、ご近所にあいさつに行った時に、「今、炊き込みご飯できたんやけど、食べてい!」って言われたりとか、急に人がすごく近い距離に迫ってくる、みたいなことがいっぱいあって。最初はどうしたものかと思ったんですが、それが、だんだん安心と心地よさに変わっていききました。「シオヤコレクション」店主

塩屋に住む人は、みな温和な人です。みんなに等しく親切。でも、配達するのはかなわん(大変な)のは、階段。塩屋は階段や坂道が多くて、道がせまいところ。「佐伯クリーニング」4代目店主

まちの雰囲気もいい。あたたかいです。困った時に声をかけられる方が多くて、店をリノベーションする時も、「あれが必要だ」って言うても言わなくても、どんでん勝手にいろんなものを持ってきてくれる。ちなみにいらぬものはお返しした(笑) 台湾料理「Ryu Cafe」

昔ながらのまちなみも大切にしつつ、新しいことも取り入れてる感じがすごく魅力的だなって。暮らしていて、歴史とか狭い道とか、ずっこのまちにきたんだって、すごく伝わってくるんです。「Itana clothing STORE」店主

道はせまいけど、心は広いっていうんかな。道を拓けるのはお金かかるけど、心を広げるのはなんもお金いらないうです。みんな仲良くやってるとちやいますか。ないものだらけやけど、まあまあ幸せはありますよ。それなりの。八百屋「みにとま」店主

まちが小さいから、朝、色んな人に会ったりして、「おはようございます」とかあいさつを交わしながら、そういう感じで毎朝お店に来られるのは、仕事との境があいまいな感じが、いいなと思ってます。「784 JUNCTION CAFE」店主

最初来た時は、せせこましくていやななと思ったけど、住めば住むだけいいなと思ってる。自分のふるさとやなと思う、海も近いし。今年に入らなかつたけど、去年は毎日泳ぎましたもん。海に泳ぐと気持ちいいね。夜光虫もおもしろい。(田仲とうふ)店主

COLUMN

どこに住むか考える散歩

2021年の春に、東京から塩屋に一家4人で移り住んだ。生まれてから小学生までで過ごしたマンションや、父方の実家が車で15分ほどの距離にあるので、いわゆるUターンにあたるのだろうか、昔からよく知っている場所というわけではなかった。塩屋について知ったのは、森本アリスさんの著書『旧グッゲンハイム邸物語』を読んだところが大きい。古い洋館を地域の人が主体となって保存し、積極的に活用している話だ。建築設計の仕事をして10年ほど続けてきて、文化財の活用について可能性を感じていて、「JRの車窓から素晴らしい瀬戸内海の風景が広がるのが塩屋あたりだったと思出したこともある。その後偶然が重なり、塩屋を案内してもらえらる機会を得た。物件をいくつか歩いて回ったのだが、なによりその道が大変に魅力的だった。建築基準法上の道路とは異なる、境界があいまいで、細く、曲がりくねり、階段も伴う、一見どこにあるかすらわからない道。その合間合間で「この空き家はおもしろくなりそう」といった話を聞く。事前にネットで見ていた不動産情報はほとんど役に立たない。建物のほうは職業柄ある程度はどうでもなるので、ここに住んだら良さそうだと身体的に感じられる場所を選ぼうと思った。ただ散歩



しているだけで楽しく、そのまちのどこに住もうかと考えながら歩くというのは、得がたい体験だった。そして、複雑な上り坂の先にある、少しだけ海の見える家を購入することにした。南に下る斜面は見晴らしがよく、北には山を背負う。東には親密な路地があり、西には荒地がある。この西の荒地は塩屋でも特に眺めの良い丘だが、市営住宅跡地として長年放置されていた。最近になって有志が整備の活動を始めたのだが、どうなっていくかは今のところまったくの未知数である。ともかく月に1~2回の草刈りに参加しながら、いろいろな人と一緒に考えている。旺盛な自然相手はコントロールがままならないこともあるが、この場所はきっと良くなるに違いない、という予感がある。そうした、ありえるかもしれない別の可能性が感じられることが、私にとってはその場所の魅力であり、生活の楽しさにつながっている。



橋本健史(橋本健史建築設計事務所) 神戸出身。横浜、浜松、東京を経て塩屋に。築55年の木造住宅を自宅兼事務所とするため、目下改修工事中。

COLUMN

アキラッチの毎日登山

毎朝6時頃、旗振山に登る。犬の散歩で塩屋中を歩き回り、旗振山への登山道が最適と判明した。4年ほど続けているので、毎日挨拶を交わす老若男女と顔見知りになる(9割が高齢の方)。「おはようさん!」と江戸っ子気質のおっちゃんもいる。挨拶不可の人もいる。大音量でラジオを聴いているからだ。目が合った時に会釈をする事で「あいつは挨拶をしない若者だ」というレッテル貼りからかううして逃れている。こんな人もいる。その日は朝から台風直撃。だが雨は止んでいた。「毎朝登山ハイ状態」だった私は「すわやっ!」と三国志の武将ばりに飛び起き、狂り狂う風雨を物とせず登頂。ずっとそこには、「おはようさん!」と、いつも元気が高い高齢のバイセンFさんがいた。きつと自分しかいないと思っていた私は「台風の日にも登ってはるんでですね!」と、侮しさとリスペクトの狭間のような震える声で話しかけた。するとバイセンは「台風?台風やからって登らん理由にはならんやろ」と言った。「いや、なるやろ」と心の中でツッコんだ。30分も歩けば山頂へ行けるほんの253メートルの高さしかない里山・旗振山。登ってみるとあつと驚く景色、あつと驚く出来事、そして何よりあつと驚くほど日々の生活が充実する。皆さんも一度登ってみる事をオススメする。



大川陽(アキラッチ) 塩屋駅高架下「ピザアキラッチ」店主。座右の銘「泣いて馬鹿を切る」。好きな食べ物「カニクリームコロッケ」。

COLUMN

SFCの釣りあれこれ

「一時間、幸せになりましたかったら酒を飲みなさい。三日間、幸せになりましたかったら結婚しなさい。永遠に、幸せになりましたかったら釣りを覚えなさい。開高健が著書「オーバ!」で紹介した中国の古語です。開高健は様々な魚と格闘しましたが、「シオヤフィッシングクラブ」が釣るのはほぼアオリイカ。イカ釣りは「餌木」と呼ばれる日本古来の疑似餌を使い、竿を激しくしゃくり続けるという、側から見ると不審な釣法です。このイカ釣りに魅せられ永遠の幸せを手にした不審者(メンバー)は、塩屋在住の中年男性3名。「クラブ」としても特に集まって何をするわけでもなく、各々勝手に釣りにするだけですが、温泉タオルやキャップなどグッズは大量に作っています。デザインは塩屋在住のイラスト



シオヤフィッシングクラブ(SFC) 山本信記(音楽家)、佐々木俊行(酒)、和久田善彦(会社員)の3人により2016年頃にばんやりと結成。



海と山に囲まれた小さなまち、塩屋

神戸市垂水区に位置する塩屋。京阪神のビッグシティからいったんリセットされ、都会とはほど遠い特徴がいっぱい詰まっている。山側は六甲山地の西の始まり、鉢伏山・旗振山の麓にあり、六甲全山縦走の起点になっている。海側は神戸港、大阪湾、友ヶ島から紀淡海峡、淡路島、明石海峡までパノラマビューが楽しめる。

夜明けには漁船の船出の音がポクポクと朝のまどろみに静かに響き、旗振山頂253mを朝食前に往復する人も多し。海では秋から春先まで海苔の養殖が行われ、漁港の海苔工場では板のりが生産される。

海と山に挟まれた谷間に肩を寄せ合うように家々が密集し、開発をまねがれた駅前の商店街は傘を差してすれ違うことができないくらい狭い。その先を歩けば、細い路地、激しい坂、階段が迷路のように張り巡らされている。目線の先の景色は変化に富み、高低差が体感される立体的なまちである。

近年、もともとあったローカルな営みに加え、住宅地の中でひっそりと個性的な商売を始める人が増えてきている。カフェ、レコード屋、古着屋、ギャラリーなど、小さなお店やおもしろい人が増え続けている。これからもゆっくとおもしろいまちであり続けるだろう。



シオヤワンダーランド